

パラダイムシフトの分岐点に立って —AI時代の医療と、人間の役割を問う—



岡崎ゆうあいクリニック 院長

小林 正学 Masanori Kobayashi

座長
福澤 嘉孝

近代医学は、知識・情報・データの積み重ねを原動力として発展してきた。私たちは 2024 年の学術集会を契機に、世界の AI 医療の急速な進展に強い危機感を抱き、「医療と AI」というテーマの探求を始めた。しかし、その危機感は現実のものとなるにとどまらなかった。この数年の人工知能の発達はさらに加速し、いまや「人としてどう生きるべきか」「そもそも仕事とは何か」という根源的な問いを、私たちに正面から突きつけるまでに至っている。

問診・検査・診断・処方・治療という一連の診療プロセスの多くの部分が、近い将来、人工知能に置き換わり得る。それは、医学を長く支えてきた「知識と情報の時代」が、ゆっくりと終わりを迎えつつあることを意味している。そのとき問われるのは、「情報処理を人工知能に委ねたあと、医師にしか担えない本来の役割とは何か」という問いである。医師が情報処理から解放されれば患者に寄り添う医療へ立ち返れる、としばしば語られてきたが、医学教育や現行の医療制度がそうした医療を本当に支えられる環境なのかは、あらためて問い直す必要がある。

さらに見落としてはならないのは、この危機感が医療だけのものではないという点である。人工知能が投げかける同じ問いは、あらゆる職種・産業においても必ず生じてくる。したがって、本学術大会が掲げる「医療と AI」は、医療者だけの課題にとどまらず、人類全体のこれからに関わる大きなテーマへとつながっている。それは突き詰めれば、「医療者としてどう生きるか」を超えて、「人としてどう生きるか」という、きわめて根源的で哲学的な問いに行き着くものである。だからこそ、本大会で扱う人工知能とは、生成 AI によって業務が効率化されたといった、目先の便利さの話ではない。むしろ、医療のあり方、ひいては人間の生き方そのものを問い直す契機として捉えたい。

本基調講演では、こうした問題意識を共有したうえで、人工知能をどう活かして日本の医療を導いていくのか、その理念と具体策を、そして「人としてどう生きるか」という根源的な問いを、参加者の皆様とともに考える場を築きたいと考えている。

略歴

2002年 富山医科薬科大学卒業、名古屋市立大学外科入局
2005年 トヨタ記念病院 外科
2007年 名古屋市立西部医療センター城北病院 外科副部長
2010年 セレンクリニック名古屋 院長
2015年 名古屋市立大学大学院医学研究科卒業
2022年 岡崎ゆうあいクリニック

所属団体等

一般社団法人日本先制臨床医学会 理事
国際水素医学研究会 理事